

知的障害者の能力 胡蝶蘭とともに開花

農業×福祉「農福連携①」



胡蝶蘭栽培による、知的障害者の自立を進める那部智史さん＝同

福祉の職場で軽視されがちな「稼ぐ」という目標を掲げ、成果を上げている「農福連携」の取り組みを伝えたい。房総半島の自然のなかにある千葉県富津市、NPO法人AlonAlon（アロンアロン）のオーキッドガーデンだ。慶弔や式典に欠かせない装花、企業の必需品である胡蝶蘭に着目して3年前に開所。知的障害者が栽培した花の販売先は2000社を超えた。それとともに、胡蝶蘭職人として技術を体得した通所者が、取引先の協賛企業に続々と就職を果たしている。（重松明子、写真も）

近ごろ都に流行るもの



胡蝶蘭職人として伸びる山形朱理さん(右)と土屋柚希さん。花の裏にスポンジを当てて正面を向かせる作業（撮影のためマスクを外しています）＝千葉県富津市のAlonAlon

200坪の胡蝶蘭ハウスに足を踏み入れると、純白の大輪が絢爛と輝き並んでいた。「ハウス1棟で年間1万本を出荷しています」。AlonAlonの那部智史理事長(51)が胸を張った。空調や風光はコンピューターの自動制御で快適な気候を再現。隣接地には2棟目が新築され、今年度1億7600万円の売り上げを見込む。

ここは、中程度の知的障害者を受け入れる就労継続支援B型事業所だ。「従来のB型事業所の工賃は月額平均1万6千円とあまりにも低い。知的障害者が何もできないと決め付けられて、内職仕事に閉じ込められている現状を変えたかった」と那部さん。その原動力は、最重度の知的障害がある一人息子の慶太さん(24)の存在だ。同僚らから「かわいそう」といわれ、社会通念に対する反骨心をたぎらせた那部さんは、ITベンチャーを起業して年商400億円企業に成長させて売却。資金を基に不動産を買ひ、家賃収入で息子の将来を担保するとともに、B型事業所を立ち上げた。収益は設備投資と障害者への工賃にあて、

自らは無報酬を貰く。栽培にあたる13人のうち6人がここで働き続けながら、企業への就職を果たしている。「自分の会社が使った花を育てることに、責任と誇りを感じる」と話すのは、イオン銀行に就職した山形朱理さん(21)。親が購読している産経新聞千葉版に載っていた胡蝶蘭ハウスの開設の記事を読んで、自ら電話をかけたことが就業のきっかけという。後輩に指導し、テキパキ働く姿は障害があるようには見えない。そんな印象を那部さんに話すと、「自己肯定感を積み重ねて、どんどん成長している。立場が人をつくるのは健常者と同じ」と目を細めた。

「つぼみを落とさないように」。花を正面に向かせる作業をしていた土屋柚希さん(21)は、「以前の施設は、毎日同じ作業でいやでした」。転所し、胡蝶蘭栽培の腕を磨いて協賛企業へ就職。「社長さんが仕事を覚えて来てくれて、感謝しています」。胡蝶蘭栽培を60工程に分け、障害と能力に応じた仕事を割り振り、向上心と自立心を促している。「より難度の高い仕事を任されて、企業に採用されたいと、みんな前向きに頑張っている。作業は2人1組で、確認し合って進めてくれている」と栽培統括責任者の大澤剛志さん(29)。人手不足の農家も歓迎。同所に農地を売り、障害者への農業指導にあたる50代女性は「大勢人が入ってくれてよかった。楽しいですよ」。個人支援者の「苗オーナー」は1500人を突破。1万円で10苗を購入すると半年で1本1万円、計10万円の生花に育つ。うち1本をオーナーに還元し、残りの売却益を障害者の工賃とする仕組みだ。「母の日などの共感消費が生まれている」と那部さん。需要拡大と遠方の就労希望者のためグループホームも建設した。最終目標は、前回紹介した帝人の特例子会社のように自社で胡蝶蘭ハウスを建て、障害者を雇用する企業が全国各地に増えること。洋ラン類の市場は、菊に続く花き2位の位置づけで、353億円(政府統計・平成30年)の出荷額を誇る。「この3割、100億円を障害者の仕事にした」と那部さん。開花させたいのは、一人一人が内に秘めている可能性だ。